

大学教育における「子どもたちの教室」に直結する造形活動の教育 —子どもたちと学校教育現場の実態を踏まえた授業内容づくり—

University Education for Formative Activity Directly Linked to Art
Classes at Elementary and Junior High Schools
— Creation of University Classes in Light of Children and Classrooms in Reality —

笹原 浩 仁

Hirohito SASAHARA

福岡教育大学美術教育講座

(平成26年9月30日受理)

学校教育現場での教員の大きな世代交代期の今、教員養成大学に求められているのは教育実践力をもった学生の育成である。本稿では、教育実践力の育成をめざす大学教育における図画工作科、美術科教育の教科教育法授業のありかたについて、二つの実践事例を通して考察した。その結果、学生が自ら造形表現の活動を楽しみながら体験すること、さらに学校現場の「子どもたちの教室」における人と人との関係性に着目しながらそれにとりくんでいく授業内容を展開していくことで、学生自身のなかに子どもを見つめる視点が形成され、授業実践力を自ら育んでいこうとする姿勢が発現することが分かった。

キーワード：子どもたちの教室、授業づくり、造形活動、教育実践力

1. はじめに

学校教育現場での教員の世代交代期¹⁾を迎えた今、教員養成大学が、教育の本質の学究の場であり続けることはもちろん、学生に教育現場での「即戦力」となり得る力をもたせる場となることはもう一つの重要な使命となる。子どもたちの造形活動による育ちを保障する図画工作科、美術科の教科教育法の授業においてもそれはまた同様である。

本稿では、その意義を踏まえ、大学における学究的教育と教育現場が求める実践的教育とに整合性をもたせ、学究と実践力養成の間に「橋」を渡し得る授業内容づくりについて、筆者のとりくんだ大学での授業実践を事例として考察し、教員養成教育における造形教育の授業のありかたを探りたい。

2. 学生の学びの現状

学生の育ちの実態と教育現場で必要とされる学

びを対峙させるとき、その間には、未だ隔たりがあることに気づかされる。

教育現場から求められている授業実践力とは、造形教育においては、(1) 学生自身が既成題材を解釈する力、さらに、(2) 主体的に教材開発や授業づくりをおこなっていく力、また、(3) 授業の背景にある諸条件を整え、授業そのものを実現できるようにしていく社会的な実行力の三つの力となるだろう。

それは、教科書等すでにある教材や授業案の構造から子どもたちにアプローチすべき教育内容を抽出し授業を構成していく力であり、また地域から、身近な問題から、子どもたちの思いから、教材となる要素を教師自身が主体的に探し出し、教育内容として構造化し授業を構築していく力である。そして、その授業を学校の教育課程上に位置づけ、実施時機、場所や施設、人的要員、材料費等を管理職、場合によっては保護者、地域住民等と相談して合意をとりつけていく行動力である。

しかし、現状の大学での教科教育は、教員の現職教育と異なり、子どもたちが目の前にいないという物理的な条件から、どうしても学びが教材研究に偏りがちになり、前述の実践力を育む学びを生んでいくことができないという現実をもつ。そのことで、大学での学びと教育現場で必要とされる学びの間に隔たりが生じてしまう。^{図1}

仮に、色に関する知識、材料や道具の扱い方に関する経験、授業構成の理論、描き、つくること自体の体験を学生たちがもち得たとしても、子どもの実態、子どもの思いを踏まえ、造形活動の教育実践としてそれをどこでどう的確に生かすべきかを具体的にシミュレートしながら学ぶことができる場がなければ、それは「子どもたちの教室」での活動、即ち教育実践力には結びついていかないのである。

わずかに教育実習がそれを学ぶ機会に当てはまるものだが、教員養成における4週間という短い実習の期間²⁾のなかでは、学生が子どもたちと向き合い一から試行錯誤して教材研究や授業づくりのスタイルを探り当てることは難しい。

吉崎(1997)は授業についての教師の知識領域³⁾を、「教材内容についての知識」「教授方法についての知識」「生徒についての知識」の3つに整理して示した。^{図2}

これを学生の現状での造形教育の学びにあてはめるとき、これまで大学の教室でおこなわれてきた教材研究の学びに加え、「子どものための造形活動」という視点と「その教授方法」についての学びをさらに補っていく必要性が見えてくる。

大学での学びを教育現場につながる実践力育成を伴ったものとするためこの「子ども観」「授業づくり」の二点を意識した教科教育法の授業実践を試みた。^{図3}

3. 授業の条件 ～学生の実態としての変数

学生の実態⁴⁾として、学生自身の意識のなかに小中学校教育における「図画工作」や「美術」の授業に対するネガティブなイメージを持つ学生は少なくない。

具体的には、(1)自分は描くことつくることが「下手」であるとの意識。(2)描くことつくることは好きだが、(コンクールに出品するため等)授業で意に反する表現を求められたため授業は嫌いであるとの意識である。

前者に関しては、学生たちが大学での教育を含め、これまでにうけた自身の造形表現への教師か

〈大学での学び（現状）〉

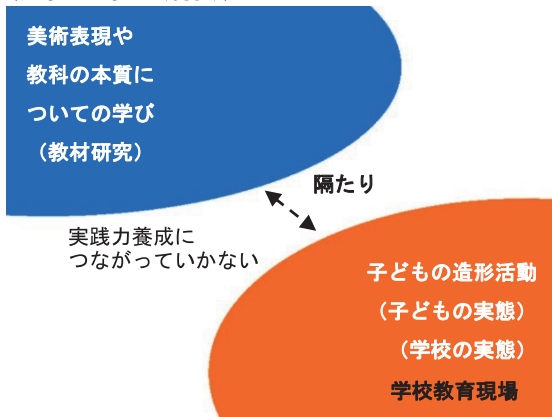


図1 子どもたちの造形活動と大学での学びの観念図（現状）

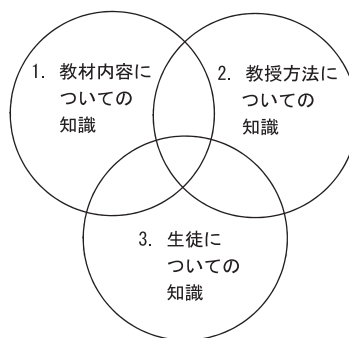


図2 授業についての教師の知識領域（吉崎，1997）

〈大学での学び（改善型）〉

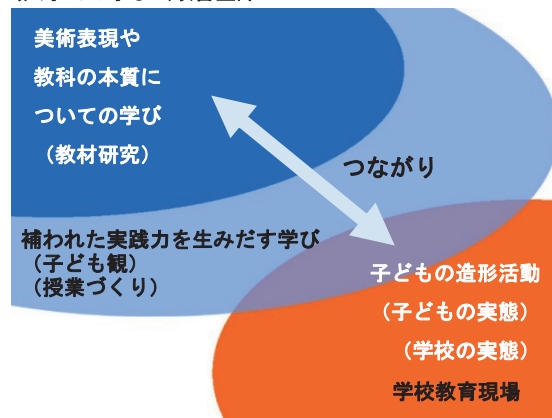


図3 子どもたちの造形活動と大学での学びの観念図（改善型）

らのネガティブな「評価」がその決定的な要因となっている。無論、評価することそのものに問題があるのではなく、教師の評価のとらえ方に問題性があったと考える。後者も、学習の主体は児童生徒自身であるということ、多様な表現を受けと

められていないという点で教師自身の教育観上の問題性を感じる。

これら条件は、「子どもたちの教室」につながる教科教育法を学ぶ学生自身の子ども観のベースになるものであり、また授業づくりのスタート地点となるものであるため、学生自身の教育実践力育成につながる学びの形成を測定していくためには可能な限り排除したい「変数」となる。

したがって、授業実施にあたっては、次の3点を前提とし、授業へのネガティブなイメージを排除しながら効果を観測していくようにした。もちろん、この3要素は、表現教育の基本的なスタンスであり、いずれの授業においても（小中学校教育現場においても）常に働かせている条件である。

- ありのままの自己表現を、臆することなくおこなうことを保障する
- かたちや色の表現を楽しみながら、自己の表現を高めようとすることを奨励する
- 表現を通して他者とかわり合いながら、自己の表現を高めようとすることを奨励する

4. 授業の実際

(1) おさかなのぼりづくり

まず、小学校の教員をめざす学生（主に初等教員養成課程学生）全員を対象とした「図工科教育研究」（学部2、3年生）の授業を事例としてとりあげる。基本的に学生たちが教科教育法を学ぶ授業は、学部4年間を通してこの授業のみである。

授業は、板書、教室の場づくり、造形活動のスケール⁵⁾を含め、実際の学校での授業を再現したかたちで行い、そこに指導方法とその際の留意点、授業の背景にある理論や子ども、学校の現実などについての解説を加えたかたちで展開していく。

その授業シミュレーションの空間のなかで、学生たちに、自身が〈つくる〉活動を通して、「子ども観」を自分のなかに育んでいこうとする見方、「授業づくり」のありかたを見つめていこうとする見方の新たな二つの視線をもたせたい。

15回という短い期間の授業であるので、そのなかで最大限教科の全貌を体験できるようにするため、以下の3題材を配置し、子どもたちへの造形活動の導入から「作品」の持ち帰りまでを具体的に体験できるかたちをとる。15回の授業展開の概要は以下のようなものである。

- 1) 講義ガイダンス（子どもたちと造形活動）
- 2) **制作1** 「おさかなのぼりづくり」
～「おさかな」を描く
- 3) ～「食紅えのぐ」で色をぬる（表面）
- 4) ～「食紅えのぐ」で色をぬる（裏面）
- 5) ～切ってはる
- 6) ～組み立てて泳がせる、持ち帰り
- 7) **制作2** 「彩色木版画づくり」
～「ゆかいな森のなかまたち」の下図を描く
- 8) ～彫刻刀で彫る（安全指導）
- 9) ～彫刻刀で彫る（表現の工夫）
- 10) ～木版画の刷り
- 11) ～木版画の刷り
- 12) ～裏彩色
- 13) ～版画の仕上げ、持ち帰り
- 14) **制作3** 「粘土を楽しもう」
- 15) 講義のまとめ、粘土焼成作品持ち帰り

上記制作1（2～6回目）「おさかなのぼりづくり」をとりあげ、具体的にその活動を眺めたい。

この題材は小学校低学年～中学年を対象とした、描くこと、彩色を通して色を楽しむこと、切ったりはったり組み立てたりして手を働かせること、つくったもので遊ぶことの多用な造形要素を備えた総合的な造形活動である。また、題材は実際の小学校現場の実践のなかから生まれ⁶⁾、たくさんのおさかなのぼり活動を経たものである。^{図4}活動の流れは以下のようなものである。

① 「おさかな」を描く

「おさかな」を描く用紙には94cm×94cmの障子紙⁷⁾を二つ折りにしたものを使う。「のぼり」であるから、風の入り口と出口を意識しながら、フェルトペンを使って思い思いの「おさかな」を



図4 「おさかなのぼりづくり」（2011）

二つ折りにした紙の両面（裏面はなぞる）に描く。

活動のポイントは紙の大きさである。小学校低学年の子どもたちにとっては、自分の身体の大きさと変わらぬ紙に全身を使って思いのかたちを描いていくことになる。「存分に描く」活動を子どもたちに提供するという造形活動のコンセプトを学生に伝える。

②「食紅えのぐ」で色をぬる

食用色素を水に溶いた「食紅えのぐ」を用い「おさかな」に彩色する。

活動のポイントは、染料の特性を生かした、紙への浸透性の高い塗り味、彩度が保たれる混色を通しての色遊び、色体験。「ふんだんに色をあつかう」体験を子どもたちに提供する。

③切ってはる

彩色までを終えた「おさかな」のアウトラインをハサミで切って糊ではり合わせる。

活動のポイントは、ハサミで曲線を切る作業、また、でんぷん糊を指にとって紙に塗り、はりあわせる作業である。ここでも子どもたちは、十分

な量の手を働かせる作業をおこなっていく。^{図6}

④組み立てる

筒状にはり合わされた「おさかな」の口に厚紙の帯⁸⁾をはり込み、紐を取り付けた後、竹の棒に結び付けて幟を完成させる。

ここでは、小学校低学年では全ての作業、中学年でも多くの作業が教師の支援のもとでおこなわれることになる。学生たちは教師としての子どもたちの造形活動をサポートしていく手作業の技術を体験する。^{図7}

⑤泳がせて遊ぶ

自分たちのつくった「おさかなのぼり」を空に泳がせてみんなで遊ぶ活動。ものづくりの達成感を味わいながら、つくったものを使って遊ぶ、子どもたちの美術表現ならではの味わい方である。^{図8}

⑥持ち帰り

学校現場でもなかなか実施できていない作品を保護しながらの持ち帰り方について、ビニール袋を用意し、適切な作品パッキング方法を示し、そ



図5 「食紅えのぐ」を使って色を楽しむ

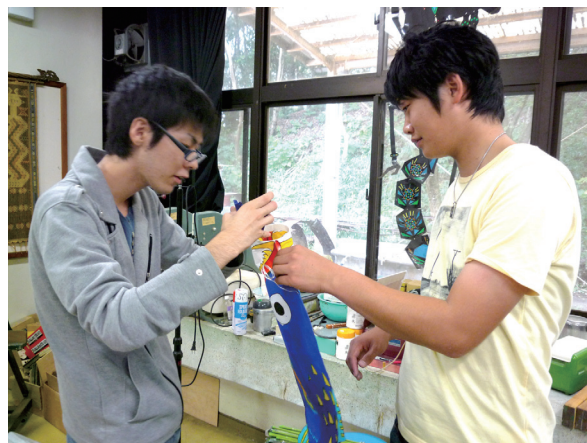


図7 手を携えて作品をしあげる



図6 指で糊をつけてはる



図8 青空の下で「おさかなのぼり」を泳がせる

の意義について考え合うようにした。

⑦ 見合う（鑑賞）活動

教室での制作者どうしの鑑賞活動は、上記全ての活動を通して、常に働いている。鑑賞活動が常時働いていることを学生たちは、クラスごとに作品に描き方や色づかひの傾向⁹⁾が生まれている事実を通して確認していくことができる。制作が常時の鑑賞活動を通して、相互に影響を与え合いながら進んでいくため、この「傾向」もまた生まれるのである。^{図9}

また、時間ごと授業冒頭、教室机の上にクラス全員の（制作中の）作品をならべて配布する場面を活用して、相互に見合う「小さな鑑賞の時間」も設けた。

以上が、「おさかなのぼりづくり」の活動の概要である。記述下線部は教育現場の実態からフィードバックされた子どもたちへの教育方法論的内容であり、前掲図1の現状の大学教育と教育現場の実態との間をつなぐ「子ども観」「授業づくり」の内容にあたるものである。

実際には、さらに微細に、子どもたちの教室の様子、学校の実態を伝えながら授業は展開する。



図9 相互に見合い、かかわり合いながら子どもたちの造形活動は進んでいく

(2) 「ねぶた」づくり

次に、小学校の教員をめざす学生のうち美術選修の学生を対象とした「児童のための美術」（学部1年生）の授業を事例としてとりあげる。この授業は選修専門の教科教育についてより学びを深めるために設けられた授業である。授業は前述の「図工科教育研究」と同じ制作を通して学ぶというコンセプトで展開し、最後の制作で、学生たちは共同制作での造形活動を体験する。

美術選修生に対しての授業であり、その内容はさらに専門性を要する題材を位置付けてあるため、自身の造形表現の力を高める学びも主体となるが、同時に、他の学生とのかかわりや授業づくりの背景を知らせていくことで、学生に「子ども観」や「授業づくり」への意識をもたせたいと考えている。

- 1) 講義ガイダンス（子どもたちと造形活動）
- 2) 制作1 「コラージュで描こう」
～エリック・カールの絵本づくりについて
- 3) ～色紙をつくる
- 4) ～コラージュで描く（絵づくり）
- 5) ～コラージュで描く（絵づくり物語づくり）
- 6) ～一枚の絵本発表会をしよう
- 7) 制作2 粘土を楽しもう
～弥生の土笛づくり
- 8) ～縄文の土器づくり
- 9) ～縄文の土器づくり
- 10) 制作3 ねぶたづくり〈共同制作〉
～つくるものを考える、下図づくり
- 11) ～支柱づくり、針金のかたちづくり
- 12) ～針金のかたちづくり、電灯の取り付け
- 13) ～紙はり
- 14) ～色つけ（時間不足分は課外活動）
- 15) 講義のまとめ
(課外：オープンキャンパスでの作品展示)

ここでは、共同制作という特質をもった制作3の「ねぶたづくり」をとりあげ授業の具体を眺めたい。

青森のねぶたに表現方法を得た小学校中学年～中学生を対象とした題材である。この「ねぶたづくり」もまた前述「おさかなのぼり」と同様、さまざまな造形活動要素をもった総合的な造形活動である。それに加え、共同制作であり大型の作品づくりとなるため、指導者の教師も含めた「協働」が最も大きな造形活動上のポイントとなる。

以下、活動の展開である。

① つくるものを考える（下図づくり）

最初に、共同制作のグループ成員で考えを出し合い、つくるモチーフを決める。実際の「ねぶた」の資料（映像）を手がかりに出来上がりへの見通しをもち、つくるものを決めていく。「何をつくるか」を子どもたちが互いの思いを出し合いながら「折り合い」をつけて決めていく、活動中の最初の山場であり、学生は自分たちの活動を通してそのことを、子どもたちの内に起こる心理的な動きまでを含めて、感得する。

モチーフ決定後も、「描く」、「司会をする」などの役割を決めてディスカッションしながら、協働して下図（配色）を描いていく活動にとりくむ。

② 支柱づくり

杉の胴縁材を使って、つくるもののかたち全体を支える柱をつくる。まず胴縁をつくるもの大きさに合わせて鋸で裁断し杵状の土台を組む。そして、そこに柱を立て固定していく。ドリルドライバーを使い細身の木ネジで固定していくようにしているので造作の自由度が高く、さまざまなかたちの作品に対応できる。しかし当然、教師の支援が必要な活動となり、学生は自身が、鋸の正しい使い方や正確な裁断のコツ、ドリルドライバーを使った木ネジでの接合の方法など、道具の使い方を「伝えられる」ことを通して、使い方を子どもたちに「伝える」ことを体験的に学んでいく。^{図10}

③ 針金のかたちづくり

10番手の針金で主な骨を組み、順次細い針金で細部の骨をつくっていく。当初、実際のねぶた同様、糸に木工ボンドをつけたもので針金を縛っていたが、制作回数を重ねるなかで、結束バンドを用いて縛る方法に変更。手が乾いた状態で作業が進められるため作業効率が上がり、子どもたち

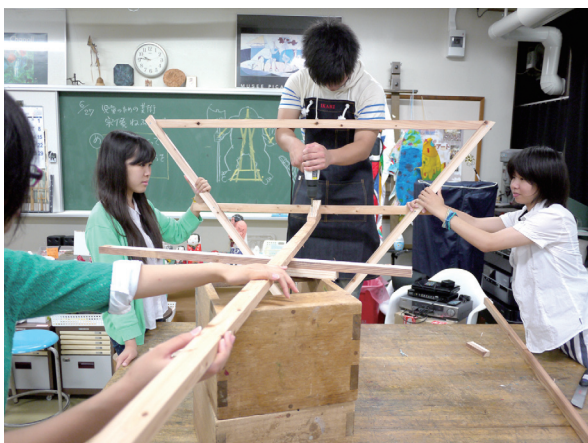


図10 支柱づくり～たくさんの手でつくっていく

の造形活動もより円滑に進められるようになった。

また、針金も、通常のものから針金を焼き鈍した比較的柔らかい性質を持つ「なまし鉄線」に変えたことで、紙をはりやすい太さのまま、かたちづくりを容易に進めていくことができるようになった。制作のなかで深化していく教材研究である。

針金でつくったねぶたの骨組みは、U字釘で所要所を木の支柱に固定していく。また、造形上の必要に応じて胴縁の支柱を付け足していく。

④ 電灯のとりつけ

紙はりに入る前に電球をとりつけ電気配線をおこなう。コンセントをつないでいだけで電球を増やしていくことができるソケットを利用したことで子どもにもできる作業とすることができた。実際は資格までが必要な電気配線も材料や方法を工夫することで子どもにも扱えるものに変えていくことができる。このような、大人レベルの技術や知識を子どもたちにその本質を失わずに伝えていくことを、通訳が言葉を翻訳して相手に伝わるようにしていくことになぞらえ「翻訳」呼び、授業づくりにおいてのその有効性を、場面をとらえ学生に伝えていくようにしている。

電球や配線はビニタイを使って支柱に縛りつけていった。^{図11}

⑤ 紙はり

針金のかたちが完成すると、針金の杵ごとに紙をはっていく作業に入る。

針金に歯ブラシや筆などを使って木工ボンドを塗り、そこに適当な大きさの和紙（障子紙を使用）をはっていく。

さらに、紙がボンドでほぼ固定されたところで、紙のはみだし部分をカッターナイフで切り取って



図11 針金の材質、結束法、容易な電気配線制作を通して、教材研究も深まる

いく。紙と紙が重なる部分では、紙にカッターナイフで浅く切れ目を入れるようにし、手で紙をちぎりとっていく。工程中最も高度な手の技が要求される部分であり、さらに子どもたちの手になじむ技法へ「翻訳」していく教材研究を進める必要がある。^{図12}

⑥ 色つけ

紙はりを終えたねぶたに彩色する。

まず、墨で造形上明確に表現したい部分をしっかりと描く。次に、溶かした蠟で細部に加飾したい線を描く。蠟で描いた線の部分は光の透過率が上がりハイライトを生む。また、絵の具をはじくため、色のにじみを防止したり色面内に細かい模様をあらわしたりする表現に生かすことができる。^{図13}

そして、最後に、色を入れる。絵の具には、発色や扱いやすさはもちろんであるが、染料系絵の具の光の透過性の高さが生かせる前出の「食紅えのぐ」を用いる。

蠟の溶解には、ガスまたは電気コンロなどの準

備が必要となるが、小中学校現場には、安全面でも配慮がなされた理科室、家庭科室があり、そしてその備品があり、施設、用具に事欠かない。大学の教室以上に造形活動上の利便性は高い。屋内外に多数設置された水回り、運動場の大空間、体育館の屋内全天候型の大空間、水をたたえたプール等、子どもたちの造形活動を展開していく上での施設としての潜在力は大きいことに気付かされる。

⑦ 協働

一連の作業を成し遂げるためには、作業のすべての過程を通して制作者どうしの協働が欠かせない。ひとつひとつの作業を成立させていくために、手を携えること、息を合わせる必要がある。また、時間内に作業を完了させるため、多人数で一斉に作業を進めることも要求される。またその間、比較的人的密度の高い作業場所の空間のなかで、常に自分や他者への安全に気を配り続ける必要がある。

しかしその活動を通して、子どもたちは、一人



図12 紙はりと裁断



図14 協働する空間を感じながらつくる



図13 墨書きと蠟書き



図15 「できあがること」を仲間と味わう

では成し得ないことが可能になるということ、作品としての「もの」が仲間との活動を通してながらできあがっていくという事実を、身をもって体験していくのである。学生もまた、その事実を自らの制作を通して実体験としてつかんでいくのである。^{図14, 15}

以上が、「ねぶたづくり」の活動の概要である。下線部は、「おさかなのぼりづくり」と同様に、学びを「子どもたちの教室」につながっていくものとするための視点である。

5. 結果 ～授業を通して得られたもの

授業は、制作活動を通じた学生の学びを単なる教材研究、制作体験に終わらせず、「子ども観」や「授業づくり」までを含めて考えを深めていくことができる学びとすること、すなわち教育実践力を育み得る授業づくりをめざした。

そこで、前述「4. 授業の実際」において下線で示した「子ども観」、「授業づくり」にかかわる授業内容の有効性について、学生の授業ごとの感想をもとにふりかえり、確かめていきたい。

(1) 存分に描く、色をあつかう、切る張るなどの手を働かせることについて（子ども観を育む視線）～「おさかなのぼりづくり」①②③

- ・大きい紙に大きな絵を描くことは普段ないので、思いっきり腕を動かして真っ白な紙に描くのは楽しかったです。下がきはせず描いたのですが、一発描きは勢いがついて良かったです。
- ・図画工作の授業は中学生ぶりで、こんなに大きな半紙に書いたのも、初めてでした。立って書くことで体を使って書いているな、と感じました。自分の頭の中で描いたものを自由に表現するのは、とても楽しかったです。
- ・久しぶりにこんな大きい紙に絵を書きました。やはり、限られた小さい紙に書くよりも大きい紙にかく方が気分もいいなと思いました。
- ・こんなに大きい紙に、いっぱいいっぱい絵を描いたのは久しぶりで、とっても楽しかったです！紙いっぱい自分が思い描いたものを描くのを楽しいと思うのは、大人も子どももいっしょだなと思いました。
- ・食紅ってこんなにキレイなんだなあと思いました。にじんだりとかもしたけれど、それがまた味わい深くでいいなあと感じました。
- ・今日の色塗りで使用した絵の具は、とても発色が鮮やかで塗っていて楽しかったです。また、友達と協力して色を作ったり、手伝いをしたりするので、子どもどうしでも出来ていいかなと

思いました。

- ・今日、さかなのぼりづくりのさかなの絵を描いてみて、もっと自由に下書きせずに描けばよかったと思いました。でも、さかなの絵を描いていると、とても楽しくなってきた、この楽しさは大切だなと思いました。
 - ・今日のはさみやのりを使う作業で、久しぶりの感覚が味わえました。
 - ・こんなに大きな絵をかいたのは久しぶりです。マッキーのにおいも、なつかしくて、楽しかったです。
 - ・今回は、大きなおさかなをハサミで切ったのりで貼りつける作業をしましたが、でんぷんのりを十何年ぶりに触ったので、とてもなつかしかったです。素材を直に手で触れながらのりをつける、でんぷんのりのよささにおいを大学生の今、再び感じる事ができてよかったです。
 - ・でんぷんのりを使ったのは幼稚園来て、久々にのりを手でぬりました。自分の手が汚れることも気にせず、のびのびと作品をつくる事ができて楽しかったです。
 - ・のりを指につけた時のひんやりする感じや指についたのりが乾いてピカピカになるのが懐かしくてうれしくなりました。子どもたちにもそういう感触、感覚を忘れないで成長してほしいです。
 - ・久しぶりのでんぷんのりのにおいで、とても懐かしい気持ちになりました。最近スティックのりしか使わないけれど、今日はなんだかあったかい気持ちになりました。
- ### (2) 子どもたちの活動を支援する教師の造形技術（授業づくりをみつめる視線）～「おさかなのぼりづくり」④、「ねぶたづくり」②
- ・今までの授業を振り返って、1番思ったのは、自分たちが楽しく作業して、安全に進めてこれたのは、先生が準備を手をかけてしてくれて、安全に対しても十分に注意して説明してくれたからだなあと思いました。
 - ・今日は土台くみをはじめました。やったけ（人名）がドリルドライバの使い方をテクって（テクニックを上げて）きて、すごくたのしいなと思いました。（ ）内は筆者
 - ・今日はみんなねぶたの馬の骨組み部分をつくりました。基礎をしっかりとっておかないと、後々作るために大変になってしまうので、注意して、先生の手助けもあっておもとの部分を作ることができました。
- ### (3) 作品を仕上げ、つくったものを使って遊ぶ（子

ども観を育む視線)～「おさかなのぼりづくり」

⑤

- ・今日やっとおさかなが完成した。青空に泳がせてみると自分が想像していた感じと全くちがった。おさかなに空気が入って立体的になって、本当のおさかなが泳いでいるみたいでとってもとっても楽しくて嬉しかった。やってよかった～！！！！
- ・久しぶりに太陽の光を浴びた気がします。めちゃくちゃモチイイ！
- ・外に出たとたん子どもに戻った大学生がはっちゃけている姿を目にすることができました。
- ・おさかな泳ぎはとてもきれいで、小学生に戻った気分でした。色合いがきれいで自分が作ったものを泳がすのは達成感でいっぱいだなと思いました。お気に入りのさかなになりました。
- ・自分が作ったこいのぼりに、なんだか愛着がわいてきました。紙がバサバサする音が心地よかったです。外でみんなとばしているのを見ると、とてもカラフルで楽しい景色になっていました。世界にひとつだけのおさかなのぼり、大切にしたいです。

(4) 作品を保護しながら持ち帰ること(授業づくりをみつめる視線)～「おさかなのぼりづくり」

⑥

- ・作品を持って帰るまで指導をすると、自分の作品が大切にされていることが実感できるし、自分の作品をもっと好きになれると思いました。自分の子どもが袋に作品を入れて帰ってきたらかわいいだろうなと思いました。
- ・単に作品を完成させるというだけでなく、それをもってかえる、あるいは、それをきちんと整えることで、自分の作品が大切にされているという自己肯定感を高めるということを知れた。

(5) 常時働いている鑑賞活動(子ども観を育む、授業づくりをみつめる視線)～「おさかなのぼりづくり」⑦、「ねぶたづくり」全般

- ・グラデーションで私はぬって見たのですが、細かく模様をかく人や、しぶきのように絵の具をちらす人もいて、人それぞれのぬり方が面白かったです。
- ・友だちの色づかいやぬり方の工夫など、感心する場面がたくさんあり、日頃見られない素敵な一面が知れてうれしかったです。
- ・人それぞれ色のぬり方が全く違ったのでとてもおもしろかったです。
- ・原色に近い色や淡い色など、人それぞれの個性があっっておもしろいと思いました。

- ・前の人の色の使い方が上手だったので、その色をもったり、作業を通して学びがありました。グループですること、一見個人作業ですが、グループで学んでいると思いました。
- ・今回は2回目の色ぬりでした。前回、友だちの作品をみて、それを今回真似したり、新しい色を作ったり、今日も前回とは違う新しい発見がたくさんありました。楽しみながら活動することが大切ですね！！実感しました。
- ・1枚の紙だったくじらがやっと形になって感動しました。
- ・色を塗り終わって、乾いた後はすごくきれいだと思えて感じた。子どもたちと一緒に作るとまた違った楽しさがあるんだろうなと思う。いよいよ来週は完成です。楽しみ！
- ・今回は児童のための美術、最終回でした。ねぶたの続きを制作しましたが、どの班も頑張っていて、すごいものができそうで楽しみです。

(6) 協働すること(子ども観を育む視線)～「おさかなのぼりづくり」全般、「ねぶたづくり」⑧⑨⑩

- ・今日はみんなで協力して、全員仕上げることを目指して活動していたかんじがしました。
- ・友だちとわいわい騒ぎながら何かを一緒につくる、というのはやっぱりいくつになっても楽しいです。作業のようすや作品、友だちの笑顔を自分のスマホにたくさん写真をとって残しました。大切な宝物です。
- ・何より友達と一緒にできたことがよかったです。お互いに助け合いながらする活動はとても素敵だなと思いました。作品だけでなくいい人間関係もきずいていけた気がします。
- ・今日はみんなが手伝ってくれて完成することができました。すごくうれしかったです。小学生だったら、いい助け合い、学び合いになるなと思いました。
- ・みんなで話し合っ作品の案をだしていくことはとても難しい事だと思いました。
- ・着物の柄の案がなかなかまとまらなかったけれど、それぞれ積極的に参加しようとしていたのはよかったと思う。うまく役割を分担してすすめていきたい。
- ・今日の授業までにねぶたを完成させることができなかつたけど、グループのみんなで意見を出し合ったり協力することを体験し、とても大切な時間だった。

学生の授業後の感想から、その回の授業の活動

を特徴づける感想をピックアップした。

(1)～(6)の観点は記した2制作のなかから筆者が抽出したものであり、造形活動における本稿でねらう全ての観点を網羅するものではない。

学生の反応からは、学生が自己の制作そのものを楽しむことを第一義としながらも、同時に、制作を通して子どもも見つめようとする視点、教師としての授業づくりをおこなう側からの視線をもって授業に臨んでいることがつかめる。

最後に、授業でめざした、学生が自身に子どもを観を育ていこうとすること(「子どもについて」)、授業づくりについて学ぼうとすること(「教授方法について」)、そして、つくる描くことを見つめながら造形活動そのものを楽しむ態度をもつこと(「教材内容について」)の3つの学びの観点をもち授業にとりくむことができたかを、同様に学生の声をもとにふりかえる。

○15回の講義を終えての学生のふりかえり

- ・おさかなをつくりました。こんなに潔く図工をしたのは人生で初めてです。自分の感覚であるのって楽しいなと思いました。
- ・講義全体を通して、小学生の気持ちになって楽しく参加できました。つくることの楽しさとおもしろさをこれからは先生の立場に立って児童に伝えていきたいと思います。
- ・講義全体を通して、「子どもの心」を思い出すことができました。何を作ろう、描こう、どうやるのかな、というワクワク感は図工の授業特有のものだと思います。教師自身(私自身)が、このワクワク感をもって授業を作り、楽しむことが大切だと思いました。
- ・今までの授業で少年の心を取り戻せました。自分達がやっていて楽しいと思えることを教師になってから実践できれば良いと思う。
- ・図工科の指導を学ぶと同時に、図工の楽しさを知ることができました。実は、小学生の頃の図工科は想像力を要求されるという点で苦手な教科1つでした。しかし、この講義で自由な作業をさせていただき、図工の楽しさを知ることができました。
- ・これまでの講義をふり返って、他の教科とは違って物づくりをしながら楽しく深めることができた。楽しい中にも、勉強になる授業のテクニックや、図工のちょっとした技術が紹介されていて私が小学校で授業する時にとってもいかせそうだ。15回という短い間で、もっと続けたいと思った。
- ・この授業で、子どもたちが作るものと同じ物で実際に作ることで、子どもの気持ちが分かるような気がしました。この経験は、子どもたちとふれ合う中でとても役に立つものになると思いました。
- ・普段の生活や講義では、色ぬりも彫刻刀も使うことがありませんが、この講義で何年振りかの道具を使って作品をつくることができ、とても楽しかったです。小学生の頃、図工の時間が好きだったことを思い出せました。
- ・この図工科教育研究では、自分が子どもの立場になったみたいで、素直に図工を楽しむことができました。ねんどを触ったり版画をほったり、何年ぶりかわからないくらいの体験をしました。どの作業もおもしろくて、このおもしろさを子どもたちに伝えてあげられる先生になりたいと思いました。
- ・この授業では、実際に作品をつくることを通して子どもや教師の立場からの視点で考えたり、気づいたりすることができた。また、作品づくりの雰囲気はとても明るくて自分もこんなふうな時間を子どもたちに提供できるようになりたいと感じた。
- ・作品を完成させるということが、とても久しぶりだったので、わくわくしながら作りました。作る楽しさを知った上で子どもに教えないとなあとと思いました。
- ・全ての授業をとおして、小学生の頃に戻った気分になりました。この楽しさを子どもたちに伝えて、心に残る授業ができたと思います。
- ・この図工科教育研究を通して、小学校の時の楽しかった図工の時間を鮮明に思い出しました。図工は、やはり楽しんで行うことが大事で、また、その為には先生の綿密な準備と教示が大事なのだと強く感じました。
- ・純粋な気持ちで作品づくりをし、普段使わない頭の部分や手の動きでとても若返った授業でした。図工で気をつけることや授業の進め方など、そのまま参考になることばかりで、楽しく勉強になりました。
- ・私は小学校のときからずっと図工に対して苦手意識を持っていました。自分が思ったように描けないし、作れないし、図工の授業の印象もあまりよくありませんでした。しかし、この授業を受けて、上手、下手は関係なく、楽しく、友だちと協力しながら作品づくりに取り組むことが大切だと思いました。また、作品を作るなかで、自分が児童に声をかけるなら、という視点

で、先生の声かけを聞き、こんな風に言われたら嬉しいな、頑張れるなととても勉強になりました。図工は楽しいと思える授業でした！

- ・この授業では、図工の楽しさやおもしろさをさらに知ることができました。指導上のポイントや留意点などがよくわかりました。しかし、なにより1番よかったのは、小学生に戻った気分で楽しむことができたのが、とても思い出に残っています。
- ・15回を通して、図工が楽しいなと思えるようになりました。私は今まで小学校～中学まで、図工、美術がキライでした。絵を描くことがすごく苦手で図工の時間が苦痛でした。でも、この授業を通して、図工の楽しさも分かったし、一生懸命やれば、よく見えてくることも分かりました。
- ・小学校の図工では、いい作品というのが限定されて、少しきゅうくつな感じがしたこともありましたが、この半年間の図工は、何をつくっても、それがステキな作品になって、とても楽しかったです。

6. 考察

「結果」に表れた学生の声をもとにすれば、「子どもたちの教室」に結びついていく学生の教育実践力を育てていくための授業のひとつのかたちは実現したと考えることができる。

そして、その要因として次の2点をあげることができる。

授業では、「うまい」「へた」の規準を排除し、「ありのままの自己表現」をせいっぱいしていくことを学びの目標とした。また、かたちや色の表現を「楽しむ」ことを奨励し、なかまとかかわる学びを奨励し目標とした。この評価の規準を明確に学生に伝え、そのことを授業を通して徹底して実践していくことで、まず活動への抵抗感が排除された「楽しく造形活動ができる」場が生まれた。

その上で、授業における造形活動の過程全体を通して、「子どもたちの教室」の姿を伝え、それに対応する授業づくりのポイントや授業の構造を伝えていった。そのことで、学生自身のなかに、自身が描きつくすることを楽しむだけではなく、子どもならどう感じるか、どう行動するかという「子どもを見つめよう」とする視点が形成され、教師ならどう準備するか、どう対応するかという「授業づくり」の視点が形成されたこと。それは、「子どもたちの教室」における、教師と子ども、子どもと子どもという、人と人との関係性

への着目であった。

そこから帰納法的に教育実践力を追究していくとする学生たちの学びの態度が芽生えはじめたのである。

註

- 1) 平成25年度教員統計調査(中間報告)を参照した。
- 2) 橋本(2014)は「日本における教員養成プログラムとその変化の社会的要請:教員志望学生の資質向上に向けて何をしなければならないか」のなかで、「佛敎大学における臨床心理士・看護師・教員養成のための実習実施状況」をあげ教員養成に関しての実習期間の短さを指摘している。
- 3) 吉崎静夫(1997)『デザイナーとしての教師、アクターとしての教師』金子書房
- 4) 「図工科教育研究」2014前期受講生349名、「児童のための美術」2014前期受講生19名を対象として調査。授業ごとに「ふりかえり(記述)」を実施した。
- 5) 作品の大きさ、表現方法などを子どものものと同じにし、矮小化したり、高度化したりしない。
- 6) 2011年、2012年に筆者による実践。他に、協力者による実践も各地で行われている。
- 7) 和紙の特性をもつものとして使用。安価。礬水が引かれていないため、絵の具の滲みの効果が楽しめる。
- 8) 商品名「クラフトバンド」
- 9) 教室ごとに、描線を描き込む、シンプルに描く、淡い色使いをする、鮮やかな色使いをする、時間をかけて描く、手早く描くなど、集団の表現上の傾向が現れる。

